

斬られたさに

夢野久作

青空文庫

「アツハツハツハツハツ……」

冷めたい、底意地の悪るような高笑いが、小雨の中の片側松原から聞こえて来た。小田原の手前一里足らず。文久三年三月の末に近い暮六つ時であつた。

石月平馬はフット立止つた。その邪悪な嘲笑に釣り寄せられるように松の霰に濡れながら近付いて行つた。

黄色い桐油の旅合羽を着た若侍が一人松の間に平伏している。薄暗がりのせいかな襟筋が女のように白い。

その前後に二人の鬚武者が立ちはだかつていた。二人とも笠は持たず、浪人らしい古紋付に大髻の裁付袴である。無反りの革柄を押えている横肥りの方が笑つたらしい。

「ハツハツハツ。何も怖い事はない。悪いようにはせんけんで一所に來さつせえちうたら……」

「関所の抜け道も教えて進ぜるけに……」

「……エツ……」

若侍は一瞬間キツとなったが、やが聴て又ヒツソリと低頭うなだれた。凝じつと考えている気配である。

「ハハ。鷹手形にせで関所は抜けられるかも知れんが吾々の眼の下は潜れんば……のう……」

「そうじゃそうじゃ……のうヨカ稚児ちごどん。そなたは男じゃなからうが……」

「……も……もつての外……」

と若侍は今一度気色ばんだが、又も力なく頭を下げた。隙すきを窺うかがっているようにも見えた。

……フウン。肥後侍かな……。

と平馬は忍び寄りながら考えた。

……いずれにしてもこの崩れかかった時勢が生んだナグレ浪人に違いない。相当腕の立

つ奴が二三人で棒組む……弱い武士と見ると左右から近付いて道連れになる。佐幕、勤王、

因いんじゆん循 三派のどれにでも共鳴しながら同じ宿に泊る。馳走をするような調子で酒肴さけさかな

を取寄せる上に油断すると女まで呼ぶ。あくる朝はドロンを極めるというのがこの連中の

定型おきまりと聞いた……歎かましい奴輩やつどもではある……。

そう考えるうちに若い平馬の腕が唸うなつて来た。

……自分はお納戸なんど向きのお使番つかいばん馬廻りの家柄……要いらざる事に拘かり合あうまい……。

とも考えたが、気の毒な若侍の姿を見ると、どうしても後あとへ引けなかった。黒田藩一刀

流の指南番、浅川一柳斎の門下随一という自信もあつた。去年の大試合に拝領した藩公の賞美刀、波の平行安の斬味見たさもあつた。

その鼻の先で鬚武者が今一度點頭き合つた。

「サアサア。問答は無益じや無益じや。一所に來たり來たり。アハハハ……アハアハ……」
女と侮つたものか二人が前後から立ち寄つて來るのを若侍はサツと払い除けた。思いもかけぬ敏捷さで二三足横に飛んだと思うと、松の蔭から出て來た平馬にバツタリ行き當つた。

「……アツ……」

と叫んだ若侍が刀の柄に手をかけたが、その利腕を掴んだ平馬は、無言のまま背後に押廻わした。二人の浪人と真正面に向い合つた。

「……何者ツ……」

「邪魔しおるかッ」

「名を名宣れッ」

という殺氣立つた言葉が、身構えた二人の口から迸つた。

「ハハ。名宣る程の用向きではないが……」

平馬は落付いて笠を脱いだ。若侍も平馬を味方と気付いたらしい。背後で踏み止まって身構えた。

「委細は聞いた。貴公達が肥後の御仁という事もわかったが、しかし大藩の武士にも似合わぬ見苦しい事をなさるのう……」

「何が見苦しい」

「要らざる事に差出て後悔すな」

「ハハ。それは貴公方に云う事じゃ。関所の役人は幕府方と心得るが、貴公方はいつ、徳川の手先になった」

二人はちよつと云い籠められた形になったが、間もなく平馬が、まだ青二才である事に気が付いたらしい。心持ち引いていた片足を二人ともジリジリと立て直して来た。

「フッフ。武士たる者が松原稼ぎをするとは何事か。両刀を手挟んでいるだけに、非人乞食よりも見苦しいぞ」

平馬がそう云う中に、相手はいつとなく左右に離れていた。こうした稼ぎに慣れ切っているらしく、平馬が持っていた菅笠を、背後の若侍に渡す僅かな隙を見て、同時に颯と斬込んで来た。その太刀先には身動きならぬ鋭さがあつた。

「……ハツ……」

と若侍が声を呑んだ。その眼の前を、平馬が撥ね上げた茶色の合羽が屏風の**びようぶ**のように遮ったが、それがバツタリと地に落ちた時、二人の浪人はモウ左右に泳いでいた。切先の間に身を翻した平馬が、一方を右袈裟に、**みぎげさ**一方を左の後袈裟に**うしろげさ**にかけて一間ばかり飛び退いていた。

俯向けに横倒おしになった二つの死骸の斬口を確かめるかのように、平馬はソロソロと近付いた。それから懐紙を出して刀を拭い納めると、

「このような者に止を刺す迄も御座るまいて……」

と独言を云い云い白い笠を目当に引返して来た。

松の雫の中に立つていた若侍は、平馬に聞こえるほど深いため息をした。

「お怪我は御座いませなんだか」

「イヤ。怪我をする間合いも御座らぬ」

と笑いながら返り血一滴浴びていない全身をかえり見た。

「ありがたい存じまする。大望を持っております身の、卑怯とは存じながら逃げる心底でおりましたところ、お手数をかけまして何とも……」

ちやんと考えていたのであろう。若侍がスラスラと礼の言葉を陳べたので、思い上つていた平馬は、すこしうろたえた。

「いや。天晴あっぱれな御心懸け……あッ。これは却かえつて……」

と恐縮うぢやましいしい茶合羽と菅笠を受取つた。

「お羨うらやましいお手の内で御座いました。お蔭様でこの街道の難儀がなくなりまして……」

「……まことに恥じ入りまするばかり……」

言葉低く語り合ううちに松原を出た。そうして二人ともタツタ今血を見た人間とは思えぬ沈着おちついた態度で、街道の傍わきに立止まつた。

明るい処で向い合つてみると又、一段と水際みずぎわ立つた若侍であつた。外八文字に踏開ふみひらいた姿が、スツキリしているばかりではない。錦絵の役者振りの一種の妖気を冴え返らせたような眼鼻立ち、口元……夕闇にほのめく蘭麝らんじゃのかおり……血を見て臆せぬ今の度胸を見届けなかつたならば、平馬とても女かと疑つたであらう。

その若侍は静かに街道の前後を見まわしながら、黄色い桐油合羽の前を解いた。ツカツカと平馬の前に進み寄つて、恭々しく、頭を下げた。

「……手前ことは江戸、下六番町しもに住居致すまいしまする友川三郎兵衛次男さぶろびょうえ、三次郎矩行のりゆきと

申す未熟者……江戸勤番の武士に父を討たれまして、病弱の兄に代って父の無念を晴らしに参りまする途中、思いもかけませぬ御力添えを……」

「ああいやいや……」

平馬は非道く赤面しながら手をあげた。

「……その御会釈は分に過ぎます。申後もうしおくれましたが拙者は筑前黒田藩の石月と申す

……」

「……あの……黒田藩の……石月様……」

といううちに若侍は顔を上げて、平馬の顔をチラリと見た。しかし平馬は何の気も付かず、心安くうなずいた。

「さようさよう。平馬と申す無調法者。御方角にお見えの節は、お立寄り下されい」

「忝かたじけのう存じまする。何分ともに……」

若侍は又も、いよいよ町重ていちょうに頭を下げた。

「……何はともあれこのままにては不本意に存じまするゆえ、御迷惑ながら小田原しゅくの宿まで、お伴仰せ付けられまして……」

「ああ……イヤイヤ。その御配慮は御無用御無用。実は主命を帯びて帰国を急ぎまするも

の……お志は千万忝かたじけのうは御座るが……」

「……御尤ごもつとも……御尤も千万とは存じまするが、このままお別れ申してはいつ、御恩返し……」

「アハハ。御恩などと仰せられては痛み入ります……平に平に……」

「……それでは、あの……余りに御情のう……おなじ御方角に参りまする者を……」

「申もうしわけ訳 御座らぬが、お許し下されい。……それとも又、関所の筋道に御懸念でも御座るかの……慮外なお尋ね事じゃが……」

「ハッ。返す返すの御親切……関所の手形は仇討あだうちの免状と共に確しかと所持致しておりま

する。讐仇かたきの生しょう国こく、苗字は申上げかねますが、御免状とお手形だけならば只今にも

お眼に……」

「ああイヤイヤ。御所持ならば懸念はない。御政道の折合わぬこの節に仇討あだうちとは御殊勝な御心掛け、ただただ感服いたす。息災に御本望を遂げられい。イヤ。さらば……さらば……」

平馬は振切るようにして若侍と別れた。物を云えば云う程、眼に付いて来る若侍の妖あでや艶かさに、気味が悪くなった体ていで、スタスタと自慢の健脚を運んだ。振り返りたいのを、

やつと我慢しながら考えた。

……ハテ妙な者に出合うたわい。匂い袋なんぞを持っているのに、たわいもない柔弱者かと思うと、油断のない体の構え、足の配り……ことに彼の胆玉と弁舌が、年頃と釣合わぬところが奇妙じや。……真逆に街道の狐でもあるまいが……。

などと考えて行くうちに大粒になった雨に気が付いて、笠の紐をシツカリと締上げた。

……いや……これは不覚じやつたぞ。「武士は道に心を残すまじ。草葉の露に足を濡らさじ」か……。ヤレヤレ……早よう小田原に着いて一盞傾けよう。

刀の手入を済ましてから宿の湯に這入ってサバサバとなった平馬は、浴衣がけのまま二階に上ろうとすると、待ち構えていたらしい宿の女中が、横合いから出て来て小腰を屈めた。

「……おお……よい湯じやつたぞ……」

「おそれ入りまする。あの……まことに何で御座いますが、あちらのお部屋が片付きまして、どうぞお越しを……」

「ハハア。身共は二階でよいのじやが……別に苦情を申した覚えはないのじやが……」

「……ハイ……あのう……主人の申付で御座いまして……」

「……そうか。それならば余儀ない」

平馬は鳥渡、妙に考えたがそのまま、女に跟いて行つた。女中は本降になつた外廊下を抜けて、女竹に囲まれた離座敷に案内した。

十畳と八畳の結構な二間に、備後表が青々して、一間半の畳床には蝦夷菊を盛上げた青磁の壺が据えてある。その向うに文晁の滝の大幅。黒ずんだ狩野派の銀屏風の前には二枚襲ねの座布団。脇息。鍋島火鉢。その前に朱塗の高膳と二の膳が並べてある。衣桁にかかつた平馬自身の手織紬の衣類だけが見すばらしい。

お小姓上りだけに多少眼の見える平馬は、浴衣がけのまま、敷居際で立止まつた。

「……これこれ女……」

女は絹行燈の火を搔立てながら振返つた。

「そちどもは客筋を見損なつてはいやらぬか。ハハハ……身共は始終、この辺を往来致す者……斯様な部屋に泊る客ではないがのう……」

「ハイ……あの……」

女は真赤になつて行燈の傍に三指を突いた。

「……まこと……主人の申付けか……」

「……あの。貴方様が只今お湯に召します中に、お若いお武家様が表に御立寄りなされまして……」

「……何……若い侍が……」

「ハイ。あのう……お眼に掛けて御挨拶致したい筋合いなれど、先を急ぎまする故、失礼致しまする。万事粗略のないようにと仰せられまして、私共にまで御心付けを……」

「……へへい。只今はどうも……飛んだ失礼を……真平、御免下されまして……」

五十ばかりの亭主と見える男が、走って来て平馬の足元に額を擦り付けた。

「……また只今は御多分の御茶代を……まことに行き届きませいで……早や……」

平馬は突立つたまま途方に暮れた。使命を帯びている身の油断はならぬ……が、志の趣意は、わかり切っている。最後の若者が謝礼心でしたに相違ないことを無下に退けるのも仰々しい……といってこれは亦、何という念入りな計らい……年に似合わぬ不思議な気転……と思ううちに又しても異妖な前髪姿が、眼の前にチラ付いて来た。

「……どうぞ、ごゆるりと……へい。まことに、むさくるしい処で御座いますが……」

と云ううちに亭主と女中が退って行つた。

平馬は引込みが付かなくなつた。そのまま床の前の緞子の座布団にドツカと腰を下して、

腕を組んでいると今度は、美しく身化粧みじまいした高島田の娘が、銚子ちようしを捧げて這入はいつて来た。

「……入いらせられませ。あの土地の品で、お口当りが如何と存じますが……お一つ……」

平馬は腕を組んだまま眼をパチパチさせた。

「お前は……女中か……」

「ハイ……あの当家の娘で御座います」

「ふうむ。娘か……」

「……ハイ。あの……お一つ……」

平馬は首をひねりひねり二三献干こんほした。上酒と見えていつの間にか陶然となった。

……ハテ。主命というても今度は、お部屋向きの甘たるい事ばかりじや。附け狙われるような筋合いは一つもないが……やはり最前の若侍が真実からの礼心であろう……。

なぞと考えまわす中に、元来屈託のない平馬は、いよいよ気安くなって五六本を傾けた。
鯉こいの洗い、木の芽田楽でんがくなぞも珍らしかった。

沈み込む程ふつくりした夜具に潜り込む時、彼は又ちよつと考えた。

……これ程の心付けをするとあれば余程の路用を持っているに違いない。友川という旗元は、あまり聴かぬようじやがハテ。何石取であろう……。

と思ううちに又も、松原を背景にした若侍の面影が天井の火影に浮かみ現われた。……水色の襟と、紺色の着物と、桐油合羽の黄色を襲ね合わせた白い襟筋のなまめかしかったこと……。

しかし、それも僅かの間のまぼろしであつた。平馬はそのまま寝返りもせず、いびきをかき初めた。

箱根を越えるうちに平馬は、若侍の事をサツパリと忘れていた。

駿府にはわざと泊らず、海近い焼津から一氣に大井川を越えて、茶摘歌と揚雲雀の山道を見付の宿まで来ると高い杉森の上に三日月が出たので、通筋の鳥居前、三五屋というのに草鞋を解いた。近くに何やら喧嘩があるという横路地の立話を、湯の中で聞きながら旅らしい気持ちに浸っていたが、その中に気が付くと一人の女中が板の間に這入つて来て、今まで着ていた木綿の浴衣を、絹らしいのと取換えている。……ハテ。何をするのか……と見ているとその女中が三指を突いて平馬の顔を見た。

「あの御客様……まことに申訳御座いませぬが只今、奥のお座敷が空きましたから、お上りになりましたらお手をどうぞ……御案内致しますから……」

小田原の出来事を思い出した平馬は返事が出来なかった。何やらわからぬ疑いと、たまらない好奇心が眼の前で渦巻き初めたので、無言のまま湯気の中から飛び出した。

「ヘイ……どうもお疲れ様で……お流し致しましょう」

揉み手をしながら小奇麗な若衆が這入って来た。新しい手拭浴衣を端折っている。

「……ウーム……」

平馬は考え込んだまま背中を流さしたが、どうしても考えが纏まらなかった。肩癖を打つ若衆の手許が、妙に下腹にこたえた。

女中に案内されて奥へ来てみると、小田原ほど立派ではないが木の香がプンプンしている二尺の間床に、小田原と同じ蝦夷菊が投入に入っている。落款は判からぬが円相を描いた茶掛が新しい。その前に並べた酒袋の座布団と、吉野春慶の平膳が旅籠らしくなかった。頭の天辺に桃割を載せて、鼻の頭をチョット白くした小娘が、かきこまってお酌をした。済まし返ってハキハキと物云う小娘であった。

「……ここは茶室か……」

「ハイ。このあいだ、清見寺の和尚様が見えました時に、主人が建てました」

平馬は床の間の掛物を振り返った。

「あの蝦夷菊はこの家の庭に咲いたのか」

「いいえ。あの……お連れのお方様が、お持ちになりました」

「……ナニ……奥方様……」

小娘は無邪気にうなずいた。

「フーム。どんな奥方様か……」

小娘はちよつと眼を丸くした。

「旦那様は御存じないので……」

「……ウムム……」

平馬は行き詰まった。知っていると云つて良いか悪いか見当が付かなくなったので……。

「……あの……黒い塗駕籠ぬりかごの中に紫色の被布ひふを召して、水晶のお珠数じゆずを巻いた手であの花をお渡しになりました。挟はさ箱みばこ持った人と、怖い顔のお侍様が一人お供ともしておりました」

「ウーム。不思議だ。わからぬな……」

「ホホホホホホ……」

小娘は声を立てて笑った。冗談と思つたらしかった。

「旦那様は鯉のお刺身と木の芽田楽が大層好きと、その御方おかたが仰おつしや言りました。それで

兄あにさんが大急ぎで作りました」

平馬はモウ一度膳部を見廻したが、思わず赤面させられた。小田原で酔うた紛れに美味おいい美味いと云つて、無暗むやみに頬張つた事を思い出させられたので……しかし……その中うちにフト青い顔になると、急に盃を置いて、小娘の顔を見た。

「……ちよつと主人を呼んでくれい」

「ハイ……」

と云ううちに小娘は燭かんびん瓶を置いて立上つた。ビックリしたらしくバタバタと出て行つた。

「……これはこれは……まだ御機嫌も伺いませいで……亭主の佐五郎奴めで御座りまする。

……何か女中が無調法でも……へへい……」

「イヤ。そのような話ではない。ま……ズツト寄りやれ。実は内密の話じゃがの……」

「へへ……左様で御座いましたか。へいへい……それに又、申もうしお遅おくれましたが、先程は、お連れ様から、存じがけも御座いませぬ……」

「アハハ。実はそのお連れ様の事に就いて尋ねたいのじゃが……」

「へへへ……どのような事で……」

「その、お連れ様という奥方風の女は、どのような人相の女であつたろうか……」

「……ヘエツ。何と仰せられます」

「その御連様というた女の様子が聞きたいのじゃ」

「……これはこれは……旦那様は御存じないので……」

「おおき。身共はその女を知らぬのじゃ」

「……ヘエツ。これはしたり……」

主人が白髪頭を上げて眼を丸くした。六十余りと見える逞ましい大男であつた。投げ卸し気味の鬚まげの恰好から、羽織うぎの捌さばき加減が、どことなく一癖ありげに見える……。

平馬は思い出した。ここいらの宿屋の亭主には渡世人上りが多いという話を……。

平馬の想像は中あたつていた。

それから平馬が物語る一部始終を聞いているうちに老人は、両手をキチンと膝に置いた貫かん碌ろくのある見構えに変つた。平馬の顔の真正面に、黒い大きな眼玉を据えていたが、話が一通り済むと静かに眼を閉じて腕を組んだ。

「……迂潤うかつな事を致しましたのう。その奥方様に私が自身でお眼にかかつておりましたならば、何とか致しようも御座いましたろうものを……若い者の鳥渡ちよつとした出入でいりを納めに参

いつております間に、飛んだ無調法を忤奴せがれめが……」

「イヤ。無調法と申す程の事でもない……が……御子息という……」

「へへ。最前お背中を流させました奴で……」

「ああ。左様か左様か。それは慮外りよがい致した」

「どう仕りまして……飛んだ周章者うろたえもので御座います。御仁体ごにんていをも弁えわきまませず、御都合も

伺いませずに斯様かような事を取計とりはからいまして……」

平馬は又も赤面させられた。

「アハハハ……その心配は無用じやわい。すでに小田原でも一度あつた事じやからのう。つまるところ拙者の不覚じやわい……」

「勿体のう御座りまする」

「……しかし供ともを連れた奥方姿というと話があまり違い過ぎるでう。世間慣れた御亭主に聞いたら様子が解りはせんかと思つて、実は迷惑を頼んだのじやが」

「恐れ入りまする。お言葉甲斐もない次第で御座りまするが、只今のような不思議なお話を承りましたのは全くのところ、只今がお初はつで御座りまする。何をお隠し申しましょう。

私も以前は二足の草鞋わらじを穿きました馬鹿者で、へイ……この六十年の間には色々珍らし

い世間も見聞きして参りましたが、それ程に御念の入りました狐狸きつねは、まだこの街道を通りませぬようで……」

「……ホホオ……初めてと申さるるか」

「左様で……表の帳場に座っておりまして、慣れて参りますと、お通りになります方々の御身分、御役柄、又は町人衆の商売は申すに及ばず、お江戸の御時勢、お国表の御ご動静ようすまでも、荒方あらかたの見当が附くもので御座いまするが……」

「成る程のう。そうあらうともそうあらうとも……」

「……なれども只今のような不思議な御方おかたが、この街道をお通りになりました事は天一坊から以来、先ず在るまいと存じまするで……」

「うむうむ……殊に容易ならぬのはアノ足の早さじゃ。身共も十五里十八里の道は日帰りする足じゃからのう……きようも焼津から出て大井川で、したたか手間取ったのじゃが……」

佐五郎老人はちよつと眼を丸くした。

「……それは又お丈夫な事で……」

「まして女にょしやう性とあれば通し駕籠に乗ったとしてもものう」

佐五郎は大きく点頭うなずいた。

「さればで御座りまする。貴方様のおみ足の上を越す者でなければ、お話のような芸当は捌さばけるもので御座いませぬが……とにかく私がこれから出向きまして様子を探つて参いりましょう。まだ左程、離れてはおるまいと存じまするで……」

「ああコレコレ。そのような骨を老体に折らせては……分別してくるればそれでよいのじやが……」

「ハハ。恐れ入りまするが手前も昔取つた杵きねづか柄……思い寄りも御座いまするでこの場はお任まかせ下されませい。これから直ぐに……」

「……それは……慮外千万じやのう……」

「……あ。それから今一つ大事な事が御座りまする。念のために御伺い致しまするが、旦那様は、そのお若いお方の讐あだうち討うの御免状を御覧になりましたか……それともその讐かたき仇うの生しょうこく国名前などを、お聞き及びになりましたか」

「いいや。それ迄もないと思うたけに見なんだが……」

「……いかにも……御尤ごもつとも様で、それでは鳥渡ちよつと一走り御免を蒙りまして……」

「……気の毒千万……」

「どう仕りまして……飛んだお妨げを……」

老亭主の佐五郎はソクサと出て行つた。……と思う間もなく最前の小娘が、別の爛瓶を持つて這入つて来た。ピタリと平馬の前に座ると相も変らず甲^{かんだか}高いハッキリした声を出した。

「熱いのお上りなさいませ」

平馬は何となく重荷を下したような気がした。

「おうおう待ちかねたぞ……ウムツ。これは熱い。……チト熱過ぎたぞ……ハハ……」

「御免なされませ……ホホ……」

「ところで今の主人はお前の父^{とと}さんか」

「いいえ。叔父さんで御座います。どうぞ御ゆつくりと申して行きました」

「何……もう出て行つたのか」

「ハイ。早ようて二三日……遅うなれば一^ひと月ぐらいかかると云うて出て行きました」

平馬は又も面喰らわせられた。

「ウーム。それは容易ならぬ……タツタ今の間に支度^ましてか」

「ハイ。サゴヤ佐五郎は旅支度と早足なら誰にも負けぬと平生^{いっしょ}から自慢にしております」

「ウーム……」

しかし中国路に這入った平馬は又も、若侍の事をキレイに忘れていた。それというものも見付の宿以来、宿屋の御馳走がパツタリと中絶したせいでもあつたろう。序にサゴヤ佐五郎の事も忘れてしまつて文字通り帰心矢の如く福岡に着いた。着くと直ぐに藩公へお眼通りして使命を果し、カタの如く面目を施した。

ところで平馬は早くから両親をなくした孤児同様の身の上であつた。百石取の安馬廻りの家を相続しているにはいたが、お納戸向きのお使番という小忙しい役目に逐われて、道中ばかりしていたので、桝小屋の小さな屋敷も金作という知行所出の若党と、その母親の後家婆に任していた。ところが今度の帰国を幸い、縁辺の話を決定めたいという親類の意見から、暫く役目のお預りを願つて、その空屋同然の古屋敷に落付く事になると、賑やかな霞が関のお局や、気散じな旅の空とは打つて変つた淋しさ不自由さが、今更のように身に泌み泌みとして来た。さながらに井戸の中へ落込んだような長閑な春の日が涯てしもなく続き初めたので、流石に無頓着の平馬も少々閉口したらしい。或る日のこと……思い出したように道具を荷いで因幡町の恩師、浅川一柳斎の道場へ出かけた。

一柳斎は、むろん大喜びで久方振りの愛弟子に稽古を付けてくれたが、稽古が済むと一柳斎が、

「ホホオ。これは面白い。稽古が済んだら残っておりやれ。チト話があるでな」

と云う中^{うち}に何かしらニコニコしながら道具を解いた。手酷しい稽古を附けてもらった平馬は息を切らして平伏した。これも大喜びで居残つて一柳斎の晩酌のお相手をした。

一柳斎は上々の機嫌で胡麻塩^{ごましお}の総髪を撫で上げた。お合いをした平馬も真赤になつていた。

「コレ。平馬殿……手が上がったのう」

「ハッ。どう仕りまして、暫くお稽古を離れますと、もう息が切れまして……ハヤ……」
「いやいや。確かに竹刀^{しなひ}離れがして来たぞ。のう平馬殿……お手前はこの中^{じゅう}、どこかで人を斬られはせんじやつたか。イヤサ、真剣の立会^{であ}いをされたであろう」

平馬は無言のまま青くなつた。恩師の前に出ると小児^{こども}のようにビクビクする彼であつた。
「ハハハ。凶星であろう。間合いと呼吸がスツクリ違つておるけにのう。隠いても詮ない事じゃ。その手柄話を聴かして下されい。ここまでの事じゃから差し置かずにのう」

いつの間にか両手を支^{つか}えていた平馬は、やっと血色を取返して微笑した。叱られるので

はない事がわかるとホツと安堵して盆さかずきを受けた。赤面しいしいポツポツと話出した。

ところが、そうした平馬の武骨な話しぶりを聞いている中うちに一柳斎の顔色が何となく曇つて来た。しまいには爛かんが冷さめても手もつかず、奥方が酌に来ても眼で追い払いながら、しきりに腕を組み初めた。そうして平馬が恐る恐る話を終ると同時に、如何にも思い迷つたらしい深い溜息を一つした。

「ふううむ。意外な話を聞くものじゃ」

「ハッ。私も実はこの不思議が解けずにあります。万一、私の不念ぶねんではなかったかと心得まして、まだ誰にも明かさずにありますか……」

「おおき。話いたらお手前の不覚になるところであつた」

「……ハッ……」

何かしらカーツと頭に上つて来るものを感じた平馬は又も両手を畳に支ついた。それを見ると一柳斎は急に顔色を柔らげて盃をさした。

「アハハ……イヤ叱るのではないがのう。つまるところお手前はまだ若いし、拙者のこれまでの指南にも大きな手拔かりがあつた事になる」

「いや決して……万事、私の不覚……」

「ハハ。まあ急せかずに聞かれいと云うに……こう云えば最早もはやお解かりじやろうが、武辺の嗜たしなみというものは、ただ弓矢、太刀筋ばかりに限ったものではないけにのう……」

「……ハ……ハイ……」

「人間、人情の取々とりとりさまさま様々、世間風俗の移り変りまでも、及ぶ限り心得ているのが

又、大きな武辺のたしなみの一つじや。それが正直一遍、忠義一途に世の中を貫いて行く武士のまことの心がけじやまで……さもないと不忠不義の輩やからに欺されて一心、国家を過あやまつような事になる。……もつともお手前の今度の過失あやまちは、ほんの仮初かりそめの粗忽そこつぐらいのものじやが、それでもお手前のためには何よりの薬じやつたぞ」

「……と仰せられますと……」

「まま。待たれい。それから先はわざと明かすまい。その中うちに解かる折もあろうけに……
 にも角にもその見付の宿の主人あるじサゴヤ佐五郎とかいう老人は中々の心掛の者じや。年の功ばかりではない。仇討免状の事を貴殿に尋ねたところなどは正まに、鬼神を驚かす眼識じやわい」

「……と……仰せられますと……」

若い平馬の胸が口惜しさで一パイになって来た。それを色に出すまいとして、思わず唇

を囁んだ。

「アハハハ。まあそう急がずと考えて見さつしやれ。アツサリ云うてはお手前の修行にならぬ。……もつともここの修行が出来上れば当流の皆伝を取らするがのう……」

「……エツ。あの……皆伝を……」

「ハハハ。今の門下で皆伝を許いた者はまだ一人もない。その仔細わけが解かったかの……」

平馬は締木しめぎにかけられたように固くなつてしまった。まだ何が何やらわからない慚愧ざんき、後悔の冷汗が全身に流るるのを、どうする事も出来ないままうなだれた。

「……平馬殿……」

「……ハッ……」

「貴殿の御縁辺の話は、まだ決定きまつておらぬげなが、程よいお話でも御座るかの……」

平馬は忽ち別の意味で真赤になった。……自分の周囲に縁談が殺到している……「娘一人に婿八人」とは正反対の目に会わされている……という事実を、今更のようにハッキリと思ひ出させられたからであつた。

「うむうむ。それならば尚更のことじや。念のために承っておくがのう。その今の話の美くしい若侍とか、又は見付の宿の奥方姿の女とかいうものが、万一、お手前を訪ねて来た

としたら……」

「エッ。尋ねて参りますか……ここまで……」

「おおさ。随分、来まいものでもない仔細がある。ところで万が一にもそのような人物が、貴殿を使つて来たとしたら、どう処置をさっしやるおつもりか貴殿は……」

「……サア……その時は……とりあえず以前の馳走の礼を述べまして……」

「アツハツハツハツハツハツ……」

一柳斎は後手を突いて伸び伸びと大笑した。

「アハアハ。いやそれでよいそれでよい。そこが貴殿の潔白なところじゃ。人間としては免許皆伝じゃ」

平馬は眼をパチパチさせて恩師の上機嫌な顔を見守った。何か知ら物足らぬような、馬鹿にされているような気持ちで……。しかし一柳斎はなおも天井を仰いで哄笑した。

「アハハハ……これは身どもが不念じやった。貴殿の行末を思う余りに、要らざる事を尋ねた。『予め搔いて痒きを待つ』じやった。アハアハアハ。コレコレ。酒を持て酒を……サア平馬殿一献重ねられい。不審顔をせずとも追ってわかる。貴殿ならば大丈夫じゃ。万が一にも不覚はあるまい」

平馬は南向の縁側へ机を持ち出して黒田家家譜を写していた。一柳斎から「世間識らず」扱いにされた言葉の端々が気にかかつて、何となく稽古を怠けていたのであった。

その鼻の先の杳脱石へ、鍬を荷いだ若党の金作がポカンとした顔付で手を突いた。

「……あの……申上げます」

「何じや金作……草取りか……」

「へエ……その……御門前に山笠人形のような若い衆が……参いました」

「……何……人形のような若衆……」

「へエ……その……刀を挿いて見えました」

「……お名前は……」

「……へエ……その……友川……何とか……」

平馬は無言のまま筆を置いて立上った。今までの不思議さと不安さの全部を、一時に胸の中でドキンドキンと蘇らせながら……。

ところが玄関に出てみると最初に見かけた通りの大前髪に水色襟、紺生平に白小倉袴、細身の大小の柄を内輪に引寄せた若侍が、人形のようにスツキリと立っていた。

すこし日に焼けた横頬を朝の光に晒しながらニツコリとお辞儀をしたので、こちらも思わず顔を赤めて礼を返さない訳に行かなかった。

……これ程に清らかな、人品のいい若侍をどうして疑う気になったのであろう……。と自分の心を疑う気持ちにさえなつた。

「……これは又……どうして……」

「お久しゅう御座います」

若侍は美しく耳まで石竹色に染めて眼を輝やかした。

「イヤ。まずまずお話はあとから……こちらへ上り下されい。手前一人で御座る。遠慮は無用。コレコレ金作金作。お洗足を上げぬか……サアサア穢苦しい処では御座るが……」

平馬は吾にもあらず歓待めいた。

若侍は折目正しく座敷に通つて、一別以来の会釈をした。平馬も亦、今更のように赤面している小田原と見付の宿の事を挨拶した。

「いや……実はその……あの時に折角の御厚情を、菅なく振切つて参いたので、その御返報かと心得まして、存分に讐仇を討たれて差上げた次第で御座つたが……ハハハ……」

平馬は早くも打ち解けて笑った。

しかし若侍は笑わなかった。そのまま眩^まぶしい縁側の植え込みに眼を遣ったが、その眼には涙を一パイに溜めている様子であった。

「……して御本懐をお遂げになりましたか」

「はい。それが……あの……」

と云ううちに若侍の眼から涙がハラハラとあふれ落ちた……と思う間もなく畳の上に、両袖を重ねて突伏すと、声を忍んで咽^{むせ}び泣き初めた。……そのスナリとした襟筋……柔らかな背中丸味……腰のあたりの膨らみ……。

平馬は愕然となった。

……女だ……疑いもない女だ……。

と気付きながら何も彼も忘^かれて啞然となった。

……最初からどうして気付かなかったのであろう……恩師一柳斎の言葉はこの事であったか。あの時に、どう処置を執^とるかと思ねられたが……これは又、何としたものであろう……。

と心の中で狼狽^{うち}した。顔を撫でまわして茫然となった。

その平馬の前に白い手が動いて二通の手紙様の物をスルスルと差出した。そのまま、拝むように一礼すると、又も咽泣むせびなきの声が改まった。

平馬は何かしら胸を時めかせながら受取った。押し頂きながら上の一通を開いてみた。ボロボロの唐紙半切とうしはんせつに見事な筆跡で、薄墨の走り書きがしてあった。

遺言の事

一、父は不忍しのばずの某酒亭にて黒田藩の武士と時勢の事に就口論つぎの上、多勢に一人にて重手負おもてい、無念ながら切腹し相果あいはつる者也。

一、父の子孫たる者は徳川の御為おんため、必ずこの仇あだを討果うち果たすべき者也。仮令たとひ血統断絶致すとも苦しからざる事。

一、敵手あいての中の主立おもだちたる一人は黒田藩の指南番浅川一柳斎と名乗り、五十前後の長身にて、骨柄逞ましき武士なること。

一、後々あとあとの事は母方の縁辺により、御老中、久世広周殿くぜひろちかに御願申上べき事 以上。

友川三郎兵衛矩兼血判

嫡男 長一郎矩道代筆印

次男 三次郎矩行 印

文久二年五月十四日

又、別紙奉書の紙には美事なお家様の文字が黒々と認めてあつた。

別紙遺言状相添え、病弱の兄に代り、次男友川三次郎矩行、仇討執心の趣、殊勝の事。

但、御用繁多の折柄に付、広周一存を以て諸国手形相添え差許者也。尚本懷の上は

父三郎兵衛の名跡相違なかるべき事、広周可含置者也

文久壬戌二年六月二日 広周 書判

平馬の顔から血の色が消えた。何もかも解かつたような気がすると同時に、又も、眼の前が真暗になつて来たので、吾れ知らず二通の手紙を握り締めた。自分の恩師を不倶戴天の仇と狙う眼の前の不思議な女性を睨み詰めた。

その時に若衆姿の女性が、やつと顔を上げた。平馬の凄じい血相を見上げると、又も新しい涙を流しながら唇を震わした。

「……御覧の……通りで御座います。兄も……弟も勞咳で臥せっております中にタツタ一人の妾が……聊か小太刀の心得が御座いますのを……よすがに致しまして、偽りの願書を差出しました。……そうして……そうして、お許しを受けますと……御免状の通り男の姿に変わりました……首尾よく箱根のお関所を越えました。それから他人様に疑われませ

ぬように、色々と姿を変えまして、どうがな致してこの思いを、貴方様^{あなた}にだけ打ち明けた
いと、心を砕きました甲斐もなく、関所破りの疑いをかけたらしい腕利きの老人に、どこ
からともなく付き纏われまして生きた空もなく逐^おい廻^{まわ}されました時の、怖ろしゅう御座
いましたこと……それから四国路まで狭^{さまよ}迷^{まよ}いまして、千辛万苦致しました末、ようようの
思いで当地に立越えてみますれば……狙^{かたき}う讐^{かたき}仇^{かたき}の一柳斎は……貴方様の御師匠さま……」
平馬をマトモに見上げた顔から、涙が止め度もなく流れ落ちた。その身内の戦^{おのの}かしよう
……肩の波打たせようは、どう見ても真実こめた女性の、思い迫った姿に見えた。
平馬は地獄に落ちて行く亡者のような氣持になった。乾いた両眼をカツと見開いて、遠
い遠い涯てしもない空間を凝視していた。

その眼の前に泣き濡れた、白い顔が迫つて来た。噎^むせかえる女性の芳香^{かおり}と一所に……。

「……それで……それで……妾は……貴方様のお手に掛かりに……まいりました」
ハツとした平馬は二尺ばかり飛び退^のいた。

「……ナ……何と……」

「……妾は、父の怨みを棄てました、不孝な女で御座います。小田原の松原からこのかた、
あ……貴方様の事ばかり……思い詰めまして……」

「……エエツ……」

「……お……お慕い申して参りました。討たれぬ……討つては成りませぬ仇とは存じながら……ここまで参いました。せめて貴方様の……お手にかかりたさに……一と思いの……御成敗が受けたさに……受けとうて……」

と云ううちにキツと唇を噛んだ若侍の姿がスルスルと後へ下がった。……それは云い知れぬ思いに燃え立つ妖火のような頬の輝やき、眼の光り……と見るうちに懐中の匕首、抜く手も見せず、平馬の喉元へ突きかかった。

「……アツ。心得違い……めさるなツ」

危うく右へ飛び退いた平馬は、まだ居住居を崩さずに両手を膝に置いていた。

「……乱心……乱心召されたかッ……讐仇は讐仇……身共は身共……」

と助けてやりたい一心で大喝した。

一方に空を突いた若侍姿はモウ前髪を振り乱していた。とても敵わぬと観念したらしく、平馬の大喝の下に息を切らしながら眼を閉じたが、又も思い切つて見開くと、火のような瞳を閃めかした。

「……ヒ……卑怯者ッ。その讐仇を討つのに……邪魔に……邪魔になるのは貴方一人……」

「……エエッ……さてはおのれ……」

「お覺悟ッ……」

という必死の叫びが、絹を裂くように庭先に流れた。白い光りが一直線に平馬の胸元へ飛んだが、床の間の脇差へかかった平馬の手の方が早かった。相手が立ち上りかけた肩先を斬り下げていた。

その切先^{きつさき}に身を投げかけるようにして来た相手は、そのまま懷劍を取落して仰^のけぞつた。両手の指をシツカリと組み合わせたまま、あおのけに倒おれると、膝頭をジリジリと引き縮めた。涙の浮かんだ眼で平馬を見上げながらニツコリと笑った。

「……本望……本望で……御座います。平馬様……」

そう云ううちに、袈裟^{けさ}がけに斬り放された生平^{きびら}の襟元がバラリと開いた。赤い雲から覗いた満月のような乳房が、ブルブルとおのきながら現われた。

「……すみませぬ……濟^{わたくし}みま……せぬ……。今までのことは、何もかも……何もかも……偽^{いつはり}り……まことは妾^{めかけ}は……女……女役者……」

と云いさして平馬の方向^{ほう}へガツクリと顔を傾けた……が……しかし、それは苦痛のためらしかった。そのまま眼を閉じてタツプリと血を吐いた。……と見るうちに下唇を深く噛

んで、白い小さな腮あごを、ヒクリヒクリとシャクリ上げはじめた。

平馬は血刀ひつさを掲げたまま茫然となっていた。

「……ええ。お頼み申します。お取次のお方はおいになりませぬか。手前は見付の佐五郎と申す者で御座います。どなたかおいでになりませぬか。お頼み申しますお頼み申しますお頼み申します……」

という性急な案内の声を他所よそ事のように聞いていた。

一柳斎は伸び伸びと肩を上げてうなずいた。

「いや。無事にお届が相済んで祝着この上もない……まず一献いっこん……」

匱にせ侍斬りに就いて大目附へ出頭した紋服姿の石月平馬と、地味な木綿もめん縞じまに町の低い役袴やくばかまを穿いた三五屋、佐五郎老人が、帰り道に招かれて夕食の饗応もてなしを受けていた。

大盆を傾けた一柳斎は早くも雄弁になっていた。

「……のう……一存の取計らいという条、仮初かりそめにも老中の許し状を所持致しておる人間じや。無下むげに斬棄てたとあつては、無事に済む沙汰ではないがのう……お江戸の威光も地に墜ちかけている今日なればこそじや。それに又、佐五郎老体の言葉添えが、最初から

立派であつたと云うからのう。番頭ばんがしらの筆頭が感心して話しおつたわい」

「どう仕りまして……無調法ばかり……」

「いや。なかなかもつて……お関所破りの鷹にせ若衆とあれば天下の御為に容易ならぬ曲くせも者と存じ、当藩の役柄の者に付き纏うところを、ここまで逐おい詰めて参いつたとあれば、大目附でも言句げんくはない筈じゃからのう……殊更に御老中の久世くぜ広周ひろちか殿も、お役御免の折柄ではあるし、迂濶な咎め立てをしようものなら却つて無調法な仇討あだうち免状が表沙汰になろうやら知れぬ。思えば平馬殿は都合のよい『生き胴』に取り当つたものじやのう。ハツハツハツ……」

酌をしていた奥方が、心から感心したように平馬の顔を見てうなずいた。

「……あれからこの四五日と申しますもの、御城下では平馬殿のお噂ばかり……」

「うむうむ。そうあらうとも……イヤ。天晴あっぱれで御座つたぞ平馬殿。あの時に、どう処置をされるおつもりかと聞いたのはこの事じやつたが……ハツハツ。よう見定めが附いたのう。佐五郎殿。そうは思われぬか……」

「御意ごいに御座います。先生様の御丹精たんせいといい、その場を立たせぬ御決断とお手の中……
拝見致しながら夢のように存じました」

「うむうむ。然るにじや。あの女の正体を平馬殿の物語りの中から見破つて来た、佐五郎老体の眼鏡の高さも亦、中々もつて尋常でないわい。実はその手柄話を聞きたいが精神で、平馬殿に申し含めて、斯様に引止めさせた訳じやが……門弟共の心掛にもなるでう」

「身に余りまするお言葉、勿体のう存じまする。幅広う申上げまする面目も御座りませぬが、初めて石月様のお物語を承っておりますうちにアラカタ五つの不審が起りました」

「成る程……その不審というのは……」

「まず何よりも先に不審に存じましたのは、あだうち 仇討に参いる程の血気の若侍が、匂い袋を持っていたというお話で御座いました。まことに似合わしからぬお話で……これは、もしや女人の肌の香をまぎらわせるためではないかと疑いながら承わっておりますと案の定、それから後の石月様の心遣いに、女ならではの行き届きかねる節々が見えます……これが二つ……」

「尤も千万……それから……」

「三つにはその足の早さ……四つには、その並外れた金遣い、……それから五つにはその眼を驚かす姿のvarietyようで御座りまする」

「いかにものう……恐ろしい理詰めじやわい」

「ザツと右のような次第で、つまるところこれは稀代の女白浪おんなしらなみではあるまいか。さもなければお話のような気転、立働らきが出来る筈はないと存じ寄りましたのが初まりで……」

「うむうむ……」

「年寄の冷水とは存じましたが、御覧の通り最早六十の峠を越えました下り坂の私。空からぐ車るまを引いている折柄で御座います、戻り駄賃に一世一代の大物を引いて見ようか……と存じますと一気に釣り出された仕事で御座いましたが、タツタ一足の事で石月様に先手を打たれまして……へへへ。面目次第も御座いませぬ」

「イヤイヤ。それにしても流石さすがは老練じや。並々の者に足跡を見せる女ではないわい」

「……とところでお言葉はお言葉と致しまして、ここに一つの不審が御座りまするが如何で御座りましょうか。御無礼とは存じますれど……」

「何の何の。何の遠慮が要ろう。何なりと存分に問うて見られい」

「へへい。有難う存じまする。それではお伺い申上げますが、先生様が、石月様のお話から、仇討あだうち免状の正体カラクリを、お覺さとりになりました次第と申しまするは……」

「アハアハ。何事かと思うたればその事か。それなれば何でもない。他愛もない事じゃ」

「……と……仰せられますは……」

「うむ。追つてお尋ねを受ける事と思うが、実は身共も少々あの女に掛り合いがあつての」
「へエツ。これは亦、思いも寄りませぬ」

「ほかでもない。忘れもせぬ昨年うちの十月の末の事じや。久方振りに殿の御用で江戸表へ参
いつておる中に、あの願書の当の本人、友川矩行という若侍かたきから父の仇敵と名乗り掛けら
れてのう……」

「へエツ。いよいよ以て不思議なお話……」

「おおき。しかも馬場先の晴れの場所で、助太刀すけだちらしい武士が二人引添うておつたが聊いささか
肝を奪われたわい。面目ない話じやが聊か身に覚えのない事じやまで……」

「成る程……御尤ごもつとも様で……」

「しかし迂濶に相手はならぬ。何か仔細がある事と思うたけに咄嗟とつさの間に身を引きながら、
如何にも身共は黒田藩の浅川一柳斎に相違ないが、何か拙者を讐仇かたきと呼ばれる仔細が御座
るか。然るべき仇討あだうちの免状でも持つておいでるかと問うてみたればそれは無い。在るに
は在つたが、浅草觀世音の境内で懷中物と一所に掏すられてしもうたと云うのじや」

「ハハア。どうやら様子がわかります」

「うむうむ。そこで……然らば、お気の毒ながら仇呼かたきよばわりは御免下されい。第一毛頭覚えのない事……と云い切つて立去りかけたところ、助太刀と共々三人が、抜き連れてかかりおつた。……然るにこの助太刀の二人というのが相当名のある佐幕派の浪人で、身共の顔を見識みしりおつて友川の手引をしたらしいと思われたが、事実、三人とも中々の者で、う。最初は峰打ちと思うたが、次第にあしらいかねて来た故、若侍を最初に仇うち棄てて、返す刀に二人を倒おしたまま何事ものう引取つたものじゃ……しかし、それにしても若侍の事が何とのう不憫に存じた故、それから後のちに人の噂を聞かせてみたところが、何でも身共の姓名を騙かたつて飲食をしておつたどこかのナグレ浪人共が、別席で一杯傾けておつた友川某なにがしという旗本に云い掛りを附けて討ち果いた上に、料理を踏倒おして逃げ失せおつた。そこでその友川の枕元に馳付けた兄弟二人が、父の遺言を書取つて、仇討の願書を差出したものじゃが、しかしその友川某という侍は兄弟二人切りしか子供を持っておらぬ。その中でも兄の方は、とりあえず家督を継ぐには継いだが、病弱で物にならぬ。その代り弟の方が千葉門下の免許取りであつたからそれに御免状が下がつた……というのが実説らしいのじゃ。不覚な免許取りが在つたものじゃが、つまるところ、そこから間違いの仇討あだうちが初まつた訳じゃ……その第一の証拠には、その旗本が斬られたという五月の頃おい、拙者

はまだこの福岡に在藩しておったからのう……ハハハ。とんと話にならん話じゃが……」
耳を傾けていた佐五郎老人はここで突然にパツタリと膝を打った。晴れ晴れしく点頭うなずいた。

「ああ。それで漸々ようよう真相が解かりましたわい。実は私も見付の在所で、お下りのお客様からそのお噂を承りまして聊いささか奇妙に存じておりましたところで……と申しますのはほかも御座いませぬ。この節のお江戸の市中まちは毎日毎日斬きり捨すてばかりで格別珍らしい事ではないと申しますのに、只今のお話だけが馬場先の返かえり討うちと申しまして、江戸市中の大層な評判……」

「ほほう。それ程の評判じやったかのう」

「間違えば間違うもので御座います……何でもその友川という若いお武家が、返り討うちに会った会った。無念無念と云うて息を引取りましたそうで、その亡骸なきがらの紋所から友川様の御次男という事が判明わかりました。それに連れて二人の助太刀も、同じ門下の兄弟子二人と知れましたが、それにしてもその返り討うちにした片相手は何人なにびとであろう。助太刀共に三人共、相当の剣客と見えたのを、羽織も脱がぬ雪駄穿せつたばきのままあしろうて、やがて一刀の下に斬棄てたまま、悠々と立去る程の御仁のお名前が、江戸市中に聞こえておらぬ筈はな

いと申しましてな……」

「ハハハ。友川の兄御も、お役を退ひかれた久世殿もその名前を御存じではあったろうが、何なにせい相手が霞が関の黒田藩となると事が容易でないからのう」

「御意の通りで御座います。……ところがここに又、左様な天下の御威光を恐れぬ無法者が現われました……と申しますのは、その御免状を盗みしました掬すり摸の女親分で御座います、当時江戸お構いになつておりました旅役者上りの、外そとがま臺お久美と申します者が、その評判に割込んで参いましたそうで……」

「うむ。いよいよ真相しやうもくに近づいて来るのう」

「御意ぎいに御座います。そのお久美と申しますは、まだ二十歳はたちかそこらの美形びけいと承りましたが、世にも珍らしい不敵者で、この評判を承りますと殊ことの外氣ほかの毒がりまして、お相手のお名前は妾わたしが存じております。キット仇かたきを取って進ぜますという手紙を添えて、大枚の金子きんすを病身の兄御にことづけた……という事が又、もつぱらの大評判になりました。それで……まことに早や、どこまで間違うて参りまするやら解からぬお話で御座いますが……」

「ハハハ。世間はそんな物かも知れんて……」

「しかし、いか程お江戸が広いと申しまして、それ程に酔狂な女づれが居りましようとは、夢にも存じ寄りませなんだが……」

「ウムウム。その事じゃその事じゃ。何を隠そう拙者も江戸表に居る中にそのような評判を薄々耳に致しておるにはおつたがのう。多分、そのような事を云い触らして名前を売りがつておるのであろう。真逆……と思ひながら打ち忘れておつたところへ平馬殿の話承つたものじゃから、実はビックリさせられてのう。あんまり芝居が過ぎおるで……」

「御意に御座いまする。もつともあの女も最初は、まだ評判の広がらぬ中に、御免状とお手形をうて、関所を越えようという一心から、敵討に扮装つたもので御座います。う。それから関西あたりへ出て何か大仕事をする了簡ではなかつたかと、あの時に推量致しましたが……」

「いかにも……ところが佐五郎どの程の器量人に逐われるとなると中々尋常では外されまい。事に依つたらこの方角へ逃げ込んで来まいものでもない。しかも当城下に足を入れたならば、何よりも先に平馬殿の処へ参るのが定跡……とあの時に思つたに、一つ平馬殿の器量を試みて見るつもりで、わざと身共の潔白を披露せずにおいたものじゃつたが。いや……お手柄じやつたお手柄じやつた……」

「まことにお手際で御座いました」

「ハハハ……平馬殿はこう見えても武辺一点張りの男じゃからのう……」

二人は口を極めて平馬を賞め上げながら盆さかずきを重ねた。酌をしていた奥方までも、たしなみを忘れて平馬の横顔に見惚みとれていた。

しかし平馬は苦笑いをするばかりであった。燃え上るような眼まなざし眸で斬りかかって来た女の面影を、話の切れ目切れ目に思い浮かべているうちに酒の味もよく解らないまま一柳斎の邸を出た。

青澄んだ空を切抜いたように満月が冴えていた。

「……これが免許皆伝か……」

とつぶやきながら平馬は、黒い森に包まれた舞鶴城を仰いだ。

平馬の眼に涙が一パイ溜まった。その涙の中で月の下の白い天守閣がユラユラと傾いて崩れて行った。そうしてその代りに妖艶な若侍の姿が、スツキリと立ち現われるのを見た。……本望で御座います……と云い云い、わななき震えて、白くなって行く唇を見た。

堀端ほりばた伝いに榊小屋ますの自宅に帰ると、平馬はコッソリと手廻りを片付けて旅支度を初め

た。下男と雇^{やとい}婆^ばの寢息を覗^{うかが}いながら屋敷を抜け出すと、門の扉^とへピッタリと貼紙をした。

「啓上 石月平馬こと一旦、女賊風情の饗応を受け候^{そうろううえ}上^{もはや}は、最早武士に候^{もは}わす。君公師父の御高恩に背き、身を晦^{くら}まし申^{もうし}候^{そうろうあいだ}間^{なにとぞ}、何卒、御忘れおき賜^{たく}わり度^{そうろう}候^う。頓首^{とんず}」

御用のため、江戸表へ急の旅立と偽^{いつはり}つて櫛形門を抜け、石堂川を渡^{わた}つて、街道を東へ東へと急いだ平馬は、フト立止ま^{とど}つて空を仰^{あが}いだ。松の梢^{こすえ}に月が流れ輝^{きら}いて、星の光りを消^けしていた。

平馬は大声をあげて泣きたい気持ちになつた。そのまま唇を噛^かんで前後を見^みか^わしたが、「……ハテ……今頃はあの三五屋の老人が感付^かいて追^おつかけて来^きおるかも知れぬ。あの老人にかかつては面倒^{めんどう}じゃが……そうじゃ……今^{うち}の中に引^ひつ外^はしてくれよう。どこまで行^いつたとてこの思いが尽^つきるものではない……」

と独^{ひとりごと}言^{こと}を云^いい云^いい引返^{ひつかえ}して、箱崎松原の中に在^ある黒田家の菩提所、崇福寺の境内に忍^{しの}び込んだ。門内の無縁塔の前に在^ある大きな拜^{おがみいし}石の上にドツカリと座を占めた。静

かに双肌もろはだを寛くつろげながら小刀の鞘を払った。

眼を閉じて今一度、若侍の姿を瞑想した。

……おお……そもじを斬ったのはこの平馬ではなかったぞ。世間せけん体の武士道……人間

のまごころを知らぬ武士道……鳥獣の争いをそのままの武士道……功名手柄一点張りの、あやまった武士道であつたぞ。……そもじのお蔭で平馬はようように真実まことの武士道がわか

つた……人間世界がわかつたわい。

……平馬の生命いのちはそもじに参いらする。思い残す事はない……南無……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：篠原陽子

2001年4月7日公開

2006年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

斬られたさに

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>